

## 林陽寺報

## さくら

ホームページ

林陽寺

検索

岐阜市岩田西 3-402 林陽寺 058-243-1380

## ご先祖様 年に一度のお里帰り 私達は 先祖様に守られている お盆の心

## お盆を迎えて

今年もお盆の季節がやってきました。昨年同様、コロナ禍の中での行事になるのででしょうか。皆が故郷に帰ることが難しいかもしれませんが、ご先祖様を敬う気持ちを忘れないで、今一度「お盆」の意味をかみしめてみましょう。

「お盆」とは、ご先祖さまの「み霊」を供養する行事です。亡くなった方やご先祖さまが家に帰り、その期間を家族と一緒に過ごすという、情緒豊かな伝統行事です。

お盆の行事は、日本では六五七年に宮中で初めて行なわれたという記述があります。以後、ご先祖さまのみならず、生きとし生けるものすべてに供養を施し、幸せを願う国民的行事として定着しました。お盆の時期は、一般に七月または八月の十三日〜十五日の三日間とされています。

## 精霊棚

ご先祖さまのみ霊をお迎える

には、まず精霊棚(盆棚)を作りまします。これは地域によってさまざまなかたが、形が異なりますが多くは真菰を編んだゴザを敷いた台を置き、そこにお膳やお供物、香炉やロウソク立てなどを設置し、お仏壇からお位牌を移します。通常、お仏壇とは別にしつらえますが、お仏壇の前に小さな机を置き、真菰を敷いてキュウ



りの馬とナスの牛を飾る等して、ご先祖様のみ霊をお迎える仕方もあります。

お供え物としては、主に次のようなものをお供えします。

・水の子(洗った生米とさいのめに切ったナス・キュウリをまぜ、蓮

の葉やお皿に盛ったもの)  
・そうめんなどの乾物

・夏の野菜・果物

・ホオズキ(み霊を導く提灯に見立てる)

・水向け用の水(水を入れた器に、ミソハギの花をそえる)

お盆期間中は「棚経」と言ってお経をの読み、菩提寺の和尚さんがお経を読みに来られます。

精霊棚のご先祖さまを供養しますので、家族そろって、一緒にお参りしましょう。

## お迎え

お迎えは十三日の夕方から夜にかけて、お墓や家の玄関先などでご先祖さまのみ霊をお迎える「迎え火」を焚きます。ご先祖さまは、迎え火の明かりを頼りに、家族のもとへお戻りになります。そしてその灯をみ霊への目印として、盆棚(仏壇)に移します。

## お送り

お盆のあいだは、ご先祖さまがそこにいるかのようにおもてなしをします。そして十五日の夕方、

地域によつては十六日の朝、み霊をお送りします。お迎えの時と同じように、玄関先で火を焚いたり(送り火)、地域によつては川や海に灯籠を流したり(灯籠流し。精霊流し)します。この時、盆棚のお供えや飾りを一緒に流す所もありますが、環境問題もありますのでお寺の持つてきていただいても結構です。

以上ご紹介したのは、数ある事例のうちの一つに過ぎません。地域によつてさまざまなお盆の迎え方があります。形はどうあれ、ご先祖さまのみ霊をまごころをもっておもてなしすることが「お盆」です。

当山のお盆の行事は、例年通り八月七日午前八時より「山門施食



会(施餓鬼会)、八月八日より十五日まで棚経(お八ガキにて予定を連絡

します)、八月二十四日午後七時より地藏盆。この行事をもつてお盆の行事が終わります。今年もよろしくお願いいたします。

コロナ禍のなかでのお盆になるかと思いますが、それにもめげず一杯お勤めしましょう。

### きょうかいし 教誨師を務めて

月に二回程度、岐阜市則松にある「岐阜刑務所」に、教誨師として通い始めて二十数年。この奉仕は私の法幢師(ほうどうし：教えを導いてくれる師匠)である加野洞泉寺の岸徹心老師より推薦をいただき曹洞宗管長より教誨師(特殊布教師)としての辞令を受け、被收容者の宗教的欲求に応えるための活動です。

こうした活動は、牢獄と言われる施設が出来た頃、教誨師年表によれば平安時代まで遡ることが出来ますが、近年では「近代宗教教誨百五十年」と言われるように、

明治の初めの監獄と言われた時代からの大切な仕事です。したがって一時公務員としての身分が与えられた時代もありました。

私が所属する岐阜刑務所は、刑務所の種別の中でも「B級と言われる施設です。明治元年に設置され、名称の変更や移転を繰り返して、昭和六十三年四月に現在地(岐阜市則松)に新築移転されました。「B級」という犯罪傾向が進んだ人を收容しています。定員は八九〇人。平成十八年頃が收容のピークで一千人以上でしたが、今は五百人位の方が收容されています。

我々が関わる教誨希望者は、単独室收容者を除いた約二百人程度の希望の内、規律違反や出所等があり、年間平均百人程度の方々です。そうした方々を各宗派の教誨師二十一名が担当しています。

普段の活動は、集団教誨と個人教誨です。他にお盆、彼岸、花まつり等、亡くなれば棺前教誨(お葬式)、お墓詣りなどがあります。教誨は、それぞれの宗派の教え

を中心に道徳的感性を高めるような活動をしています。我々も時々研修があります。制服組でない教誨師等に対して、刑務所の職員の方々の話の中から我々に対し「生きがいがづくり」「安心して話すことのできる場の提供」「傾聴的アプローチ」「グッドライフとしてのモデル(より良い生活を送るための目標的人物)」などへの期待が感じられます。私にとつての教誨の指針となっています。いずれにしても、教誨を受けることにより被收容者の心情の安定に繋がり、所内における生活に落ちつきがでてくると伺っています。

集団教誨は、坐禅が中心です。般若心経を大きな声で読み、二十分程静かに坐り、それから十分程お話をします。坐禅は、「調身・調息・調心」といつて「ととのえる」ことを大切にとか、「坐」の字の説明をしたり、「自分を見つめること」の大切さ等のお話をしています。個人教誨は、供養が中心です。親族や被害者の命日に故人の冥福

を願い、また、父母の訃報に接した際に行う供養です。毎回「般若心経」の写経が納められることもあります。

「教誨は自己の信ずる教義に則して、宗教心を伝え被收容者の徳性を涵養するとともに、心情の安定を図り、被收容者には自己を洞察して健全な思想・意識・態度を身につけさせ、同時に遵法の精神を培い、更生の契機を与える。これをもって、矯正の実を上げ、社会の安定に寄与することを目的」としていますが、教誨を終えて、いつも思うことはこんなことではないかと反省ばかり。いつも緊張感をもって、施設に入りますが、気持ちを和らげていた、だく所員の皆様方には感謝の気持ちで一杯です。

「坐禅」や「読経」を通して、お話をするのですが一方的な話が多く、個人教誨以外、言葉をかけることはありません。

最近、クラブ活動に「坐禅」を加えていただきました。人数も少なく言葉を交わすことも時々あり

ます。三十分ほどですが「この静かな時間がなにもにも代えがたい」と感想を述べてくれます。被收容者に



とつて 普段の生活は、集団生活です。作業も生活も食事も言わばプライベート

「坐禅」の一時はまさに自分の時間です。一心に坐る姿の大切さを教えていただきました。私たちが宗門の教えは、「生活即仏道」。常に「仏のみ子」として、日々の行いが即仏道であり、「行持」(仏道の修行を常に怠らずに続けること)であります。いわゆる「行住坐臥」。そうした気持ちを「話」の中から聞き取ってもらい、言葉を交わさないなかでも気持ちを理解し、

所内での規律ある生活をすることを望んでいます。また、曹洞宗の教義の根幹である「四大綱領」(布施・愛語・利行・同事)を時に応じて読み解き、悔い改め、三宝に帰依し、菩薩の誓願を誓い、感謝報恩を旨とし、他を思う心を育てるような教誨を目指しています。しかしながら、基本である被收容者の悩みとか苦しみなどを十分に聞き取っていないことを痛感しながら教誨をしているのが現状です。

この度「法務大臣」感謝状を頂き、日頃の活動の一端を報告させていただきました。今後とも、ご協力よろしくお願いいたします。

### 可睡齋での思い出

#### 弟子 峰雪

修行から帰ってきてもうすぐ三ヶ月が経とうとしています。先日、ちようど今ぐらいにやつと師寮寺(自分にとつての師匠がいるお寺)に出した時の一通の手紙を見せてもらい、一年前の記憶が蘇ってきました。

今回、住職から修行寺での体験を何回かに分けて書き、皆さんにお伝えしたらどうかとのお話がありました。折角の機会ですので思い出しながら書かせていただきます。

昨年の四月八日、お釈迦様のお誕生日の日に満月に照らされながら、桜の木の下で断髪式をしました。途中で母がゆきちゃんごめんね、なんていいながら切るので覚悟はしていましたが泣いてしまいました。

十日、静岡の袋井市にある曹洞宗秋葉総本殿可睡齋に上山をしました。可睡齋は、徳川家康の故事によりその名が付き、秋葉の火防霊場として全国津々浦々に信仰を集める禅道場です。地方の僧堂としては大きく、女性や海外の方にも門戸を開いているお寺です。また、袋井市の観光寺院としての顔を持つお寺でもある為、一年中四季折々イベントがあり多くの観光客が訪れるお寺でもあります。

私が可睡齋を選んだ理由は、こうした現代的な開かれたお寺での



経験をしてみたいと思ったからでもありません。

上山日、丸坊主になった私は、綱代笠（あじろがき）を被り、袈裟行季（けさごうり）をかけ、着物、衣を膝までたくし上げ、足首に脚絆に草鞋を履き、座蒲を持った、まさに雲水姿で木版を三打鳴らしました。山に響くような大声で「御開山拜登、並びに免掛塔宜しゅう」と修行道場に入る為の言葉を言い続けます。途中で何か言われても怯まずに言い続けるのです。泣きそうになりましたが……。係の方が出てくるまでかなりの時間を待たされ、ようやく出てきた僧に、「何を



しに来た？」「と問われ、

「修行を参りに来ました！」と応えると、「修行はここでなくとも師寮寺でもできるだろう、さつさと帰れ！」と突き放されます。それをなんとか食い下がって入門を請うのです。これが第一の関門です。ようやく山内に入ると旦過寮（たんがりよう）で三日間、朝から晩まで坐を組み、生活の基本をみっちり叩き込まれます。これが第二の関門です。同日に上山したのは三名で、女性は一人でしたので別の部屋で過ごしました。携帯はもはやありませんし、時間もわからないので、何時に起きているのかもわかりませんでした。寝床が他の寮から遠かった為、二日目の夜が大嵐で夜中に寝床の襖が風で飛んでいつてしまい、怖いし、誰も来てくれないし、何時かもわかりませんでした。このように旦過寮中は、ほとんど寝た気がしません。すごい洗礼を二日目にして受けました。

の生活が始めるのです。修行中のことを安居（あんご）と言いますが、雲水が安居中に覚えることは、朝課の配役、御神殿での祈祷法要、法事等お寺に関わることを全てを生活の中から学びます。（続く）

## お庫裏のツツヤキ

### 「貯筋に励むべし」

この三月に左肩とそれに繋がる筋肉が痛くてたまらなくなった。背中のでアスナーを扱うのも痛い。「あ痛たたあー。」の日々が始まった。

いろいろ治療を試してみたが、結局は、「肩腱板障害」と診断された。重い物を持ちたり巻肩の状態で姿勢が悪くなったりして起こるそうだ。そういえば、コロナ禍になってから、筋トレ体操もヨガも休みが多くなっていた。

実は、お檀家のCさんが岐阜市の筋トレサポーターの資格をとられてから、毎週木曜日の9時から一時間。近くの方々と、林陽寺で指

導を受けるようになっていた。今年で、十年目になる。休みなら、自分で取り組めばよいのだが、一人となるとなかなかできない。

最近「フレイル（虚弱）」という言葉をよく耳にするが、まさしくそれに繋がる生活であったと反省しきりである。簡単な体操をしつつ食事に気をつけ交流を心がけたいものだと思った出来事であった。

1. さあ、スクワットや踵上げ
2. 貯筋、貯筋。貯筋に励むべし。
3. ……

お寺の本堂で演歌コンサート



お寺の本堂で演歌コンサート  
3月28日、岐阜市岩田西にある八幡山林陽寺で第15回しだれ桜コンサートが開催され、しいの実さんが「高山の夜」などの演歌を歌いました。  
当日は会場の本堂を開放し、検温などの新型コロナウイルス対策を万全にしての開催。  
しいのさんは大分県出身で1969年に「高山の夜」でデビュー、岐阜を拠点に活躍をしています。  
当日は「のぞみ（希望）」「てるてる小唄」や「四季の歌」「ふるさと」も披露され、来場者はしっとりとした情緒にひたっていました。